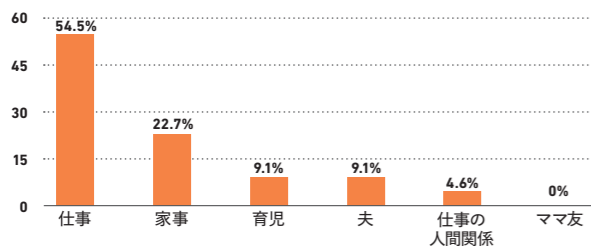


■どんなことにストレスを感じているか



「復職後の生活について」アンケート
 ●実施：2023年4月～5月 ●調査法：オンラインアンケート
 ●調査対象：新米ママラボ会員 22人

最後に、先輩ママとして、これからママとなる後輩へ向けてメッセージを贈ってもらいました。「怒涛の日々もかけがえない時間」「世界が広がって楽しくなる」「一緒に頑張りましょう！」「自分一人では抱え込まないで」「自

新米ママから未来のママへ

貴重な意見だと思えます。この先も楽しく頑張ってください！

「子育てはまだまだ母親に負担が多いのが現状。今後は、夫

いし、仕事も頑張りたい、もどかしい」「ママばかり損をする。昇進ができない。なんのために働いているのか」「責任と裁量のある仕事を任せてもらえないのはモチベーションが上がらない」「食事の支度が大変なので、子連れ食堂があればいいのに」「夫の働き方改革を。自分の働き方を変えざるを得ない」「子どもの体調不良に理解のない職場で、復職後半年で退職しました」……。働きながらの子育てはまだまだ母親に負担が多いのが現状。今後は、夫

婦ともに己の成長を実感でき、仕事のモチベーションもアップできるような働き方や環境作りが必須になりそうです。

では、少子化を食い止めるにはどうしたらいいのか、夫婦それぞれに意見を聞いてみました。ママの意見は「妊活支援をしてほしい」「打ち合わせにも託児室」「リモートワークの定着」「パパも早く帰れる制度」「育児取得者がいる部署の社員は給料アップ」「北欧の子育て制度を取り入れた思い切った政策」など。パパの意見は、「パパの

時短勤務の補助制度」「結婚や子育てに対するポジティブなイメージを若い人たちが持つる社会づくり」「子どもがこんなに可愛いものだとこのことを啓蒙する」「父親の育児の義務化」「教育費の無償化」など。ママは、産むまでの支援も大切だけれど、「産んだ後に心身ともに働きやすい環境を作ることが少子化を食い止める」と言い、パパたちは、職場の理解、経済的な支援を求める一方、結婚のよさや子どもの可愛さの啓蒙など、ママたちよりはひっそり迫っていない側面が浮き彫りになりました。子どもをひとり育てて感じた「少子化対策」は

未来へ向けて

国や会社は、働くママの声に耳を傾け、妊娠前から復職以降まで心身ともに働きやすい環境を整えるべき。子育て世代にもっと手を差し伸べる社会になれば、2人目の妊娠にも希望が持てる。その結果、少子化が食い止められる可能性はあるだろう。

やまと・たかよ

女の欲望ラボ代表、女性生活アナリスト。専門は、女性の意識行動研究。独自の「マイルド文法」により、20代～70代女子、アジア男子の本音を探り続ける。アジア15カ国の亜女子ラボも活動中。SNSを駆使し随時情報収集。
<https://www.omnanoyokubou.jp>

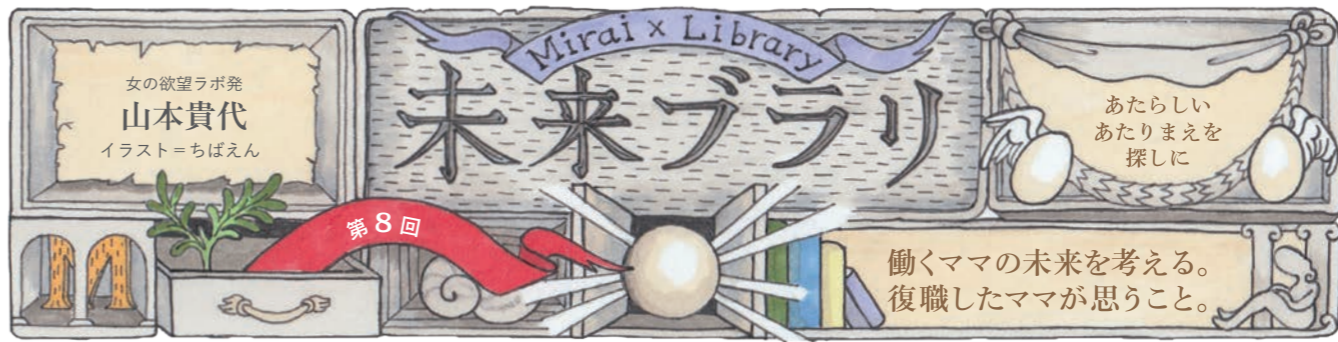


分の子ども世代ではもっと働きやすい世の中になるように、私たちができることは少しずつやっていきましょう！

「両立は本当に大変だけれど、子どもは死ぬほど可愛いし子育ては絶対楽しいから頑張る！ 夫への愛情が減らないように気をつけて。笑」「自分らしく過ごせる優先順位をしっかりと考えて」など。初めて妊娠、出産、育児を経て、不安と闘いながらも逞しく成長した新米ママたち、経験したからこそそのポジティブな力強いエールです。どこか自分へのエールにも聴こえました。まだまだ続く子育て、この先も楽しく頑張ってください！

亜女子ブラリ

ジャカルタ女子の多くは、ママになっても働きます。3ヶ月の産後、親に預けたりシッターを雇って仕事復帰するのがメジャーです。常に道が大渋滞なので、通勤に2～4時間かかり、働きながらの子育ては大変。保育所は充実していないそう。ファビオラさんは、家族との時間を大切にしたいと、結婚後は会社勤めを辞め、自宅オフィスでお洒落な詰め替えボトルのネットショップを立ち上げました。起業する女性はまだまだ少数派。彼女はシッターを雇っていませんが、友だちには皆シッターがいるので、例えば5人のママたちが誰かの家に集まると、夫もシッターも同行して、大パーティー(20人)になるのだとか。アジアならではの賑やかな光景です。



日常はコロナの蔓延で一変。急ぎ足でやってきた少し先の未来を、欲望・行動・価値観の観点から女性の視点で解説。本音を探るアンケートから、新たな気づきを発見するコーナーです。

怒涛のような日々を送る新米ママたち

働くママの未来を考えるシリーズ最終回、まずは、妊娠・育児を経て復職した新米ママたちの現状を見ていきましょう。22人中8割近くはママが仕事復帰し、ほとんどの子どもは保育所に通っています。働き方は人それぞれ、時短をとる(10人)、時短はとらない(2人)、フレックスタブを活用(3人)、在宅勤務を活用(5人)など。なかには、出張でもできる限り子どもを連れて行くママもい

るようです。復職後の毎日は、「だいたい思い描いていた通りだった」という人は、「思い描いていた通りではなかった」という人より多かったのですが、復職後の日々をひとりで表してもらうと、「怒涛の一日」「毎日戦い」「毎日一杯」「瞬間」「ヘトヘト」「ストレスの玉手箱」といった言葉が飛び交います。しかし「母でありながら自分でもある日々」「慌ただしいが社会とのつながりを感じる」「周囲へのありがたみを感じる貴重なもの」という意見もあり、大変だけれど充実

している様子が見えそうです。

復職して変わった仕事への意識とは

保育所へ預けることで、号泣したり抱っこが増えた我が子を見て、「我慢させているのではないか」「復職は早かったかも」と、罪悪感を持つママもちらほら見ましたが、言葉を覚えたり友だちができたりと家庭では得られない刺激や体験もあり、不安はプラスの実感へと変わっていったようです。復職後の夫の育児への協力的な気持ちは、「育児中の方が協力的だった気がする」という意見もありますが、もともと協力的な夫が多く、「育児中と変わらない」が4割以上、「協力的になった」が3割以上で、夫婦で子育てに取り組んでいる家庭が多いようです。ママたちのストレスはというと、1位：仕事(54.5%)、2位：家事(22.7%)で、3位：育児(9.1%)、4位：夫(9.1%)と、仕事へのストレスが一番高いのが実態です。ただ、環境が激変する中で、働き方や仕事への意識変化もありました。「働く母の涙をすごく感じた」「残業しないよう

に」「タイムパフォーマンスを死ぬほど考えるようになった」「優先順位や限界効用の低いものは思い切って切り捨てる」「自分が頑張ればなんとかなるという自己犠牲の考え方がなくなった」「計画性が増した」「家に帰ってからの余力を残す」「より良い環境を求めて転職するのもアリかな」など。ダラダラなんてしてられないママたちは、子どもと過ごす時間を優先して、よりワークライフバランスを意識しはじめたようです。

育児との両立と、ママパパが考える少子化対策

仕事に対する意識はだいぶ変わりましたが、この先両立できるのかという心配もよぎります。「職場などで」子連れで働くことに対して、社会がもっと協力的であればいいのに」「息子とも一緒にいた

